



学部長挨拶
経済学部長 後藤 孝夫

白門経友会

二〇二五年十一月から経済学部長を務めております後藤孝夫と申します。

白門経友会の皆さまには、中央大学ならびに経済学部の研究教育活動に対し、多大なるご理解と温かいご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。諸先輩方が築き上げてこられた輝かしい伝統を引き継ぎ、本会のさらなる発展と中央大学経済学部の隆盛のために尽力する所存です。

さて中央大学は、二〇二五年に創立一四〇周年を、そして経済学部は創立二二〇周年という記念すべき節目をそれぞれ迎えました。経済学部が拠点を置く多摩キャンパスにおいても、「實地應用ノ素ヲ養フ」という建学の精神を受け継ぎつつ、時代の急速な変化に対応した教育改革が着実に進められています。

現在、経済学部では、確かな理論的基盤の修得に加え、デジタル社会の進展に対応すべくデータサイエンス教育の導入や、複雑化するグローバル課題を解決するための実践的なプログラムが強化されています。豊かな自然環境の中、真理探究の志を持った後輩たちが活発に学んでいます。

さらに、私たちは未来を見据えた大きな変革の只中にあります。二〇二七年四月には、新学科体制(二学科四コース)への移行が計画されており、AIの進化、気候変動、経済安全保障といった現代社会が直面する喫緊かつ複雑な課題に対し、経済学の新たな視点から解決策を提示しうる人材を育成するための改革であると私たちは位置付けております。伝統を重んじながらも、常に時代の先を読み、自己変革を続ける姿勢こそが「中大経済」の真骨頂であり、私たちはこの新たな挑戦を力強く前へ進めてまいります。

こうした中大経済の進化を支え、推進していく上で、卒業生の皆様の存在は不可欠です。各界で活躍される同窓生の皆様の姿は、現役学生に



学科再編の特設サイトでは、教員の対談インタビューや経済学のコラムも掲載されています。
経済学部 学科再編 特設サイト <https://economics.v.chuo-u.ac.jp>



とって何よりの目標です。白門経友会という強い絆を通じて寄せられる、皆様の実社会での知見や活力は、学生のキャリア支援や教育環境の充実にとってかけがえのない財産となっております。

今後とも、中央大学経済学部は時代の要請に応える人材育成に邁進してまいります。白門経友会の皆さまにおかれましては、後輩たちの成長のために温かいご指導と倍旧のご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

※会報第七五号(二〇二二年一月一日)には、後藤先生の自己紹介が掲載されております。

中央大学資料館見学会

大学史資料館で「中央大学創立一四〇年記念展示 一四〇年のあゆみ」が開催されたのにあわせて、九月二六日(金)に資料館の見学会を行いました。



▲大学史資料館がある多摩キャンパス「炎の塔」

参加者は四名でしたが、資料館スタッフにガイドしていただきながら、法と正義の資料館、大学史資料館を見学いたしました。ガイドしていただいたおかげで、展示内容についてより深く知ることができました。駿河台校舎の講義室の(現物)展示では机に落書きが残っていることを教えていただくなど、単に展示されているものを順に見ていくのはひと味違った有益なものとなりました。

見学会の後は、都合により見学会

には参加できなかった方も加わって、近くの居酒屋で懇親会を催し、楽しいひとときを過ごしました。

今後、こうした催しを企画したいと考えておりますので、その際はふるってご参加下さい。

なお、「一四〇年のあゆみ」は四月二七日(月)まで開催しております。まだご覧になってない方は、ぜひお越しください。インターネットでもご覧いただけます(以下QRコードから)。



◆学生による見学レポート

経済学部一年生 小笠原 凜花

このたび中央大学創立一四〇周年の特別展示を拝見し、大学の歴史の大きさを改めて感じました。入学してまだ間もない一年生の私にとって、展示で紹介されていた出来事は新鮮で、母校への理解が深まる貴重な機会となりました。

イギリス法律学校として始まった歴史から、学部や活動が広がっていく歩みとともに、マグナカルタや人権宣言、女性参政権、ベルリンの壁崩壊といった世界の出来事が並べられていたのが印象的でした。大学の歴史が、社会の変化や人々の価値観と重なり合っていることを感じました。

また、学生生活の展示からは、戦後から続く白門祭や、一九九〇年代まで行われていた五〇キロのナイトハイクといった活動を知り、羨ましさを感じました。さらに、学生運動が盛んだった時代の記録からは、当時の学生の熱意や責任感が伝わってきました。

一四〇年の歴史の延長線上に、いま自分の学生生活があることを誇ら

総会案内

しく思います。私も中央大学の一員として、この伝統に新しい一步を加えられるよう、四年間を大切に過ごしていきたいです。

白門経友会総会の日程が決まりました。また記念公開講演会の講師は篠原正博教授にお引きお受けいただきました。詳細は後日、HPにてお知らせいたします。

日時 六月一三日(土)
場所 中央大学多摩キャンパス
七号館(経済学部棟)

◆秋学期の一コマ



7号館3階の経済学部図書室が、学生ラウンジとして生まれ変わりました。経済学部生への公募により「7laBo(なならぼ)」と命名され、9月22日にオープン。コミュニケーションや自学習の場として利用されています。

百周年記念奨学金 受給生の活躍

経済学部創立百周年記念奨学金
募金推進委員会委員長
濱岡 剛

二〇〇五年、経済学部創立百周年の際に多くの篤志家から寄せられた多額の寄付に基づいて、経済学部生のキャリア形成に必要な能力の向上を支援することを目的として、二〇〇九年度にご篤志を原資とした奨学金が創設されました。この奨学金は給付型の奨学金であり、明確な将来の夢を抱き、その実現に向けて計画を立て、熱意を持ってチャレンジする学生を支援することを意図しております。

その成果の一端を皆様にご紹介するために、会報八三号(二〇二三年一月)において受給者のレポートを掲載させていただきました。本号では経済学科四年生の児玉萌さんに、本奨学金を利用した活動を報告していただきます。

この奨学金は皆様の芳志に支えられております。これからもご協力のおよしくお願いいたします。

◆国際協力を仕事にするために

経済学部四年生 児玉 萌

私は、「誰もが自分の人生を自分で選択できる社会」の実現に貢献したいという強い想いを持ち、大学卒業後は国際協力を仕事にすることを志してきました。

この志の原点となったのは、高校時代に授業で見た映像です。そこには、途上国の子供たちが貧困や家庭環境を理由に、学びたいのに学校に通えない状況が映し出されています。特に、同年代の少女が若くして出産し、通学を諦めざるを得なかったと話す姿を目の当たりにし、自分との環境の違いに大きな衝撃を受けました。この経験から、教育機会の提供を通じて、途上国の人々が将来に希望を持てる社会を作りたいと強く考えるようになりました。

大学では、その想いを実現するための力をつけるべく、林光洋ゼミで開発経済学や国際協力を深く学びました。そして、理論的な知識だけでなく、途上国の現場を知る「調査・研究の実践力」と、国際的な舞台で通用する「高度な語学力」を身につけることが不可欠であると考え、大

学三年次に二週間のフィリピン現地調査を実施しました。調査の事前準備や活動中、実際に英語を活用することで実践的な語学力獲得にも努めました。

フィリピンでは、経済成長が続く一方で、都市部のスラムや地方では依然として多くの人々が貧困状態にあります。特に、商品を小分けにし、低価格で販売する「サリサリストア」という伝統的な零細小売店は、低所得者層にとって生活に欠かせないインフラです。フィリピンの小売業者の九割以上が零細小売業者であり、



▲現地調査で訪問したサリサリストア

その中でもサリサリストアは地域住民の生活に密着して食品や日用品などを販売しています。

サリサリストアは、誰でも簡単に開業できるため、貧困層の貴重な収入源となっています。しかし、多くの店主は専門的な経営知識やスキルを持たないため、資金繰りに苦しみ、長期的な経営を続けることが難しいという課題を抱えています。店主も利用度も低所得者層であるサリサリストアの持続的な経営は、彼らの自立と生活の安定に直結する大きな問題です。こうした背景から、私の調査活動は「サリサリストアの経営改善における店主向け経営教育の役割」を探ることをテーマとしました。

今回の活動では、経営教育を提供する現地の政府機関 (TESDA)、スポンサー企業 (Coca-Cola Philippines)、経営教育の卒業生団体 (PASCO) といった支援機関へのインタビューに加え、実際に店舗を訪問し、経営教育を受けた店主と受けていない店主、合計四五名の方々から直接お話を伺うことができました。

本調査を通じて、経営教育が「商品仕入」「在庫管理」「財務管理」の三点において、店主の行動変容に大きな効果を持つことを実証できました。かつては「非計画的な仕入れ」や「どんぶり勘定」を行っていた店



▲現地調査でサリサリストアにインタビューしている様子

主たちが、教育を通じて効率的な仕入れや正確な帳簿付けを習得し、その結果、売上の向上や死蔵在庫の削減を実現していました。自らの力で利益を生み出し、計画的に資金を運用できるようになることこそが、貧困からの脱却と自立への大きな一歩であると考えます。

現地調査にて、文献やデータだけでは決して見えてこない、貧困層の生の声や生活の実態に触れることで、彼らが直面する課題は、多岐にわたる要因が複雑に絡み合っていることを肌で感じました。

また、国際協力を舞台に活躍することを目標とする上で不可欠な高度な英語力の獲得にも注力しました。

フィリピン人留学生で、アジア開発銀行での勤務経験を持つ方から個別レッスンを受講し、実際の国際機関の資料をテキストとして使用しました。これにより、専門的な英語表現だけでなく、調査研究において必須となる実践的なコミュニケーション能力を徹底的に磨き上げることができました。さらに、レッスンを通じて、国際機関で働くために求められるスキルや倫理観といった、貴重な知見を得ることができたのも大きな成果です。

この度の活動を通じて、貧困問題は経済、教育、社会構造といった多角的な視点からアプローチしなければ解決できない複雑な課題であると改めて実感しました。経済学部創立百周年記念奨学金によるご支援のおかげで、私は文献調査では踏み込めなかつた現地でのインタビュー調査

や、国際機関の現場を知る方からの集中的な語学指導を受けることができ、目標達成への大きな一歩を踏み出すことができました。心より感謝申し上げます。

そして、このフィリピンでの現地調査の経験が実を結び、今年度四月に独立行政法人国際協力機構(JICA)より内定をいただき、夢であった国際協力を仕事にすることが決まりました。

ここからが私にとっての新たなスタートです。今回の調査で、実際に現場を目で見て生の声を聞くことの重要性を何よりも強く実感しました。だからこそ、今後仕事をしていく際にも、一方的な支援を押し付けるのではなく、現地の声に耳を傾け、相手と共に考え学びあう国際協力を実践していきたいと強く願っています。

編集後記

本号では、昨年十一月に経済学部長に就任された後藤先生からご挨拶を頂戴いたしました。先生には、慣例により、本会の会長を兼務していただくこととなります。

さて、本年度をもって退職される先生は以下の通りです。

伊藤秀一先生(ドイツ語)

ゲイリー・W・キャンター先生(英語)

加藤木能文先生(英語)

鳥居伸好先生(理論経済学)

多田由彦先生(理論経済学)

※アイウエオ順

長く勤められてきた先生方がお辞めになるのは残念なことではあります。代わって就任される新任教員の方々が新しい風を吹き込んでくれることを期待したいと思います。

(幹事長 濱岡 剛)

経済学部創立百周年記念奨学金へ募金のお願い(目標金額 6,000万円)

学生のキャリア形成を金銭面から後押しする「経済学部創立百周年記念奨学金」の原資が、三年後にも尽きようとしています。経済学部創立百周年に寄せられた篤志から創設され、以来十年間で約二百名の学生を後押しし、各々が大きな成果を挙げてきた本奨学金を、これからの学生たちにも同様の制度として継続したく、現奨学金への追加という形で皆様の支援を賜りたくお願い申し上げます。



募金方法や税制上の優遇措置など、詳しくはWEBサイトをご覧ください。中央大学ホームページの経済学部トップから赤色のバナーをクリック。スマホはQRコード読み込みでお進みください。

2025年1月31日 第91号
発行 白門経友会常任幹事会
編集 白門経友会編集委員会
〒192-0393
東京都八王子市東中野 742-1
中央大学経済学部内
URL : www.wg-keiyukai.com
Fax : 042-673-3425